

吾輩は猫である

夏目漱石

十	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一
一	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•
•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•
•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•
•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•
•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•
•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•
•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•
二	一	一	一	九	八	六	四	三	十	一
二	七	四	〇	十	十	十	十	十	五	一
七	八	三	九	三	八	二	九	七		

目次

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたか々と見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間で一番癡悪な種族であつたそうだ。この書生というのは時々我々を捕えて煮て食つという話である。しかしその当時は何という考もなかつたから別段恐しいとも思わなかつた。ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあつたばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものを見始である。この時妙なものだと思つた感じが今でも残っている。第一毛をもって裝飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで薬缶だ。その後猫にもだいぶ逢つたがこんな片輪には一度も出会わした事がない。のみならず顔の真中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々ぷうぷうと煙を吹く。どうも咽せぼくて実に弱つた。これが人間の飲む煙草というものである事はようやくこの頃知つた。

この書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐っておったが、しばらくすると非常な速度で運転し始めた。書生が動くのか自分だけが動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が悪くなる。到底助からな
いと思つていると、どさりと音がして眼から火が出た。それまでは記憶しているがあとは何の事やら
いくら考え出そうとしても分らない。

ふと気が付いて見ると書生はいない。たくさんおつた兄弟が一疋も見えぬ。肝心の母親さえ姿を隠
してしまつた。その上今までの所とは違つて無暗に明るい。眼を明いていられぬくらいだ。はてな何
でも容子がおかしいと、のそのそ這い出して見ると非常に痛い。吾輩は藁の上から急に笹原の中へ棄
てられたのである。

ようやくの思いで笹原を這い出すと向うに大きな池がある。吾輩は池の前に坐つてどうしたらよ
ろうと考えて見た。別にこれという分別も出ない。しばらくして泣いたら書生がまた迎に来てくれる
かと考え付いた。ニヤー、ニヤーと試みにやつて見たが誰も来ない。そのうち池の上をさらさらと風
が渡つて日が暮れかかる。腹が非常に減つて来た。泣きたくても声が出ない。仕方がない、何でもよ
いから食物のある所まであるこうと決心をしてそろりそろりと池を左りに廻り始めた。どうも非常に
苦しい。そこを我慢して無理やりに這つて行くとようやくの事で何となく人間臭い所へ出た。ここへ
這入つたら、どうにかなると思つて竹垣の崩れた穴から、とある邸内にもぐり込んだ。縁は不思議な

もので、もしこの竹垣が破れていなかったなら、吾輩はついに路傍に餓死したかも知れんのである。一樹の蔭とはよく云つたものだ。この垣根の穴は今日に至るまで吾輩が隣家の三毛を訪問する時の通路になつている。さて邸へは忍び込んだものこれから先どうして善いか分らない。そのうちに暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降つて来るといふ始末でもう一刻の猶予が出来なくなった。仕方がないからとにかく明るくて暖かそうな方へ方へとあるいて行く。今から考えるところはすでに家の内に這入つておつたのだ。ここで吾輩は彼の書生以外の人間を再び見るべき機会に遭遇したのである。第一に逢つたのがおさんである。これは前の書生より一層乱暴な方で吾輩を見るや否やいきなり頸筋をつかんで表へ抛り出した。いやこれは駄目だと思つたから眼をねぶつて運を天に任せていた。しかしひもじいのと寒いのはどうしても我慢が出来ん。吾輩は再びおさんの隙を見て台所へ這上つた。すると間もなくまた投げ出された。吾輩は投げ出されては這い上り、這い上つては投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返したのを記憶している。その時におさんと云う者はつくづくいやになつた。この間おさんの三馬を偷んでこの返報をしてやつてから、やつと胸の痞が下りた。吾輩が最後につまみ出されようとしたときに、この家の主人が騒々しい何だといいなから出て来た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けてこの宿なしの小猫がいくら出しても出して御台所へ上つて来て困りますという。主人は鼻の下の黒い毛を撚りながら吾輩の顔をしばらく眺めておつたが、やがてそんなら

内へ置いてやれといったまま奥へ這入ってしまった。主人はあまり口を聞かぬ人と見えた。下女は口惜しそくに吾輩を台所へ抛り出した。かくして吾輩はついにこの家を自分の住家と極める事にしたのである。

吾輩の主人は滅多に吾輩と顔を合せる事がない。職業は教師だそうだ。学校から帰ると終日書齋に這入ったぎりほとんど出て来る事がない。家のものは大変な勉強家だと思つてゐる。当人も勉強家であるかのごとく見せてゐる。しかし實際はうちのものがいふような勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に彼の書齋を覗いて見るが、彼はよく昼寝をしてゐる事がある。時々読みかけてある本の上に涎をたらしてゐる。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色を帯びて弾力のない不活潑な徴候をあらわしてゐる。その癖に大飯を食つ。大飯を食つた後でタカジヤスターゼを飲む。飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ読むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。これが彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考える事がある。教師というものは実に楽なものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんな寝ていて勤まるものなら猫にでも出来ぬ事はないと。それでも主人に云わせると教師ほどつらいものはないそうで彼は友達が来る度に何とかかんとか不平を鳴らしてゐる。

吾輩がこの家へ住み込んだ当時は、主人以外のものにははなはだ不人望であつた。どこへ行つても跳ね付けられて相手にしてくれ手がなかつた。いかに珍重されなかつたかは、今日に至るまで名前さえ

つけてくれないのでも分る。吾輩は仕方がないから、出来得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍にい
る事をつとめた。朝主人が新聞を読むときは必ず彼の膝の上に乗る。彼が昼寝をするときは必ずその
背中に乗る。これはあながち主人が好きという訳ではないが別に構い手がなかったからやむを得ん
のである。その後いろいろ経験の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天気の良い昼は椽側へ寝る事とし
た。しかし一番心持の好いのは夜に入つてこのうちの小供の寢床へもぐり込んでいっしょにねる事
である。この小供というのは五つと三つで夜になると二人が一つ床へ入つて一間へ寝る。吾輩はいつ
でも彼等の中間に己れを容るべき余地を見出してどうにか、こうにか割り込むのであるが、運悪く小
供の一人が眼を醒ますが最後大変な事になる。小供は ことに小さい方が質がわるい 猫が来た
猫が来たといつて夜中でも何でも大きな声で泣き出すのである。すると例の神経胃弱性の主人は必ず
眼をさまして次の部屋から飛び出して来る。現にせんだつてなどは物指で尻ぺたをひどく叩かれた。
吾輩は人間と同居して彼等を観察すればするほど、彼等是我儘なものだと断言せざるを得ないよう
になった。ことに吾輩が時々同衾する小供のことに至つては言語同断である。自分の勝手な時は人
を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、抛り出したり、へつついの中へ押し込んだりする。しかも吾
輩の方で少しでも手出しをしようものなら家内総がかりで追い廻して迫害を加える。この間もちよつ
と畳で爪を磨いたら細君が非常に怒つてそれから容易に座敷へ入れない。台所の板の間で他が顫えて

いても一向平気なものである。吾輩の尊敬する筋向の白君などは逢う度毎に人間ほど不人情なものはないと言つておらるる。白君は先日玉のような子猫を四足産まれたのである。ところがその家の書生が三日目にそいつを裏の池へ持つて行つて四足ながら棄てて来たそうだ。白君は涙を流してその一部始終を話した上、どうしても我等猫族が親子の愛を完くして美しい家族的生活をするには人間と戦つてこれを剿滅せねばならぬといわれた。一々もつとも議論と思う。また隣りの三毛君などは人間が所有権という事を解していないといつて大に憤慨している。元来我々同族間では目刺の頭でも鯉の臍でも一番先に見付けたものがこれを食つ権利があるものとなつている。もし相手がこの規約を守らなければ腕力に訴えて善いくらいのものだ。しかるに彼等人間は毫もこの觀念がないと見えて我等が見付けた御馳走は必ず彼等のために掠奪せらるるのである。彼等はその強力を頼んで正当に吾人が食い得べきものを奪つてしましている。白君は軍人の家におり三毛君は代言の主人を持つてゐる。吾輩は教師の家に住んでゐるだけ、こんな事に関すると両君よりもむしろ楽天である。ただその日その日がどうにかこうにか送られればよい。いくら人間だつて、そういつまでも呆える事もあるまい。まあ気を永く猫の時節を待つがよからう。

吾輩は新年来多少有名になつたので、猫ながらちよつと鼻が高く感ぜらるるのにはありがたい。

元朝早々主人の許へ一枚の絵端書が来た。これは彼の交友某画家からの年始状であるが、上部を赤、下部を深緑りで塗つて、その真中に一の動物が蹲踞うすくましているところをパステルで書いてある。主人は例の書齋でこの絵を、横から見たり、豎たてから眺めたりして、うまい色だなという。すでに一応感服したものだから、もうやめにするかと思つとやはり横から見たり、豎たてから見たりしている。からだを拗ねじ向けたり、手を延ばして年寄が三世相さんせそうを見るようにしたり、または窓の方へむいて鼻の先まで持つて来たりして見ている。早くやめてくれないと膝ひざが揺れて喉吞けんのんでたまらない。ようやくの事で動揺があまり劇はげしくなくなつたと思つたら、小さな声で一体何をかいたのだらうと云う。主人は絵端書の色には感服したが、かいてある動物の正体が分らぬので、さつきから苦心をしたものと見える。そんな分らぬ絵端書かと思ひながら、寝ていた眼を上品に半なかば開いて、落ちつき払つて見ると紛まぎれもない、自

分の肖像だ。主人のようにアンドレア・デル・サルトを極め込んだものでもあるまいが、画家だけに形も色彩もちゃんと整って出来ている。誰が見たって猫に相違ない。少し眼識のあるものなら、猫の中でも他の猫じゃない吾輩である事が判然とわかるように立派に描いてある。このくらい明瞭な事を分らずにかくまで苦心するかと思うと、少し人間が気の毒になる。出来る事ならその絵が吾輩であると云う事を知らしてやりたい。吾輩であると云う事はよし分らないにしても、せめて猫であるという事だけは分らしてやりたい。しかし人間というものは到底吾輩猫属の言語を解し得るくらいに天の恵に浴しておらん動物であるから、残念ながらそのままにしておいた。

略

三毛子は死ぬ。黒は相手にならず、いささか寂寞の感はあるが、幸い人間に知己が出来たのでさほど退屈とも思わぬ。せんだつては主人の許へ吾輩の写真を送ってくれと手紙で依頼した男がある。この間は岡山の名産吉備団子をわざわざ吾輩の名宛で届けてくれた人がある。だんだん人間から同情を寄せらるるに従つて、己が猫である事はようやく忘却してくる。猫よりはいつの間にか人間の方へ接近して来たような心持になつて、同族を糾合して二本足の先生と雌雄を決しようなどと云う量見は昨今のところ毛頭ない。そののみか折々は吾輩もまた人間世界の一人だと思ふ折さえあるくらいに進化したのはたのもしい。あえて同族を軽蔑する次第ではない。ただ性情の近きところに向つて一身の安きを置くは勢のしからしむるところで、これを変心とか、軽薄とか、裏切りとか評せられてはちと迷惑する。かような言語を弄して人を罵詈するものに限つて融通の利かぬ貧乏性の男が多いようだ。こう猫の習癖を脱化して見ると三毛子や黒の事ばかり荷厄介にしている訳には行かん。やはり人間同等の

氣位きいで彼等の思想、言行を評論ひやんろんしたくなる。これも無理はあるまい。ただそのくらいな見識を有して
いる吾輩われらをやはり一般猫児いっぱんぼねいの毛はの生えたものくらいに思って、主人が吾輩に一言いちごんの挨拶あいさつもなく、
吉備団子きびだんごをわが物顔ものがおに喰い尽したのは残念の次第である。写真もまだ撮とって送らぬ容子ようすだ。これも不
平と云えば不平だが、主人は主人、吾輩は吾輩で、相互の見解けんげが自然しぜん異なるのは致し方もあるまい。
吾輩はどこまでも人間になりすましているのだから、交際をせぬ猫の動作は、どうしてもちよいと筆
に上ありにくい。迷亭めいてい、寒月諸先生の評判ひやうばんだけで御免蒙ごめんまうる事に致そつ。

略

四

例によって金田邸へ忍び込む。

例によつてとは今更いまさら解釈する必要もない。しばしばを自乗じじょうしたほどの度合を示す語である。一度やつた事は二度やりたいもので、一度試みた事は三度試みたいのは人間にのみ限らるる好奇心ではない、猫といえどもこの心理的特権を有してこの世界に生れ出でたものと認定していただかねばならぬ。三度以上繰返す時始めて習慣なる語を冠せられて、この行為が生活上の必要と進化するのもまた人間と相違はない。何のために、かくまで足繁あししばしばく金田邸へ通うのかと不審を起すならその前にちよつと人間に反問したい事がある。なぜ人間は口から煙を吸い込んで鼻から吐き出すのであるか、腹の足たしにも血の道の薬にもならないものを、恥はかし気もなく吐吞とたんして憚はからざる以上は、吾輩が金田うらむらに出入するのを、あまり大きな声で咎とがめ立てをして貰いたくない。金田邸は吾輩の煙草たばこである。

忍び込むと云うと語弊がある、何だか泥棒か間男まおとこのようで聞き苦しい。吾輩が金田邸へ行くのは、

招待こそ受けないが、決して鯉の切身をちよるまかしたり、眼鼻が顔の中心に痙攣的に密着している狎君などと密談するためではない。何探偵？ もつてのほかの事である。およそ世の中に何が賤しい家業だと云つて探偵と高利貸ほど下等な職はないと思つている。なるほど寒月君のために猫にあるまじきほどの義侠心を起して、一度は金田家の動静を余所ながら窺つた事はあるが、それはただの一遍で、その後は決して猫の良心に恥ずるような陋劣な振舞を致した事はない。そんなら、なぜ忍び込むと云うような胡乱な文字を使用した？ さあ、それがすこぶる意味のある事だて。元來吾輩の考によると大空は万物を覆うため大地は万物を載せるために出来ている。いかに執拗な議論を好む人間でもこの事実を否定する訳には行かない。さてこの大空大地を製造するために彼等人類はどのくらいの労力を費やしているかと云うと尺寸の手伝もしておらぬではないか。自分が製造しておらぬものを自分の所有と極める法はなからう。自分の所有と極めても差し支えないが他の出入を禁ずる理由はあるまい。この茫々たる大地を、小賢しくも垣を囲らし棒杭を立てて某々所有地などと劃し限るのはあたかもかの蒼天に繩張して、この部分は我の天、あの部分は彼の天と届け出るような者だ。もし土地を切り刻んで一坪いくらの所有権を売買するなら我等が呼吸する空気を一尺立方に割つて切売をして善い訳である。空気の切売が出来ず、空の繩張が不当なら地面の私有も不合理ではないか。如是觀によりて、如是法を信じている吾輩はそれだからどこへでも這入つて行く。もつとも行きたく

ない処へは行かぬが、志す方角へは東西南北の差別は入らぬ、平気な顔をして、のそのそと参る。金田ごときものに遠慮をする訳がない。しかし猫の悲しさは力づくでは到底人間には叶わない。強勢は権利なりとの格言さえあるこの浮世に存在する以上は、いかにこつちに道理があつても猫の議論は通らない。無理に通そうとすると車屋の黒のごとく不意に肴屋の天秤棒を喰う恐れがある。理はこつちにあるが権力は向うにあると云う場合に、理を曲げて一も二もなく屈従するか、または権力の目を掠めて我理を貫くかと云えば、吾輩は無論後者を択ぶのである。天秤棒は避けざるべからざるが故に、忍ばざるべからず。人の邸内へは這入り込んで差支えなき故込まざるを得ず。この故に吾輩は金田邸へ忍び込むのである。

略

五

二十四時間の出来事を洩れなく書いて、洩れなく読むには少なくとも二十四時間かかるだろう。いくらかに吾輩を鼓吹する吾輩でもこれは到底猫の企て及ぶべからざる芸当と自白せざるを得ない。従つていかに吾輩の主人が、二六時中精細なる描写に価する奇言奇行を弄するにも関らず逐一これを読者に報知するの能力と根気のないのはなほだ遺憾である。遺憾ではあるがやむを得ない。休養は猫といえども必要である。鈴木君と迷亭君の歸つたあとは木枯しのはたと吹き息んで、しんしんと降る雪の夜のごとく静かになつた。主人は例のごとく書齋へ引き籠る。小供は六畳の間へ枕をならべて寝る。一間半の襖を隔てて南向の室には細君が数え年三つになる、めん子さんと添乳して横になる。花曇りに暮れを急いだ日は疾く落ちて、表を通る駒下駄の音さえ手に取るように茶の間へ響く。隣町の下宿で明笛を吹くのが絶えたり続いたりして眠い耳底に折々鈍い刺激を与える。外面は大方朧である。晚餐に半へんの煮汁で鮑貝をからにした腹ではどうしても休養が必要である。

ほのかに承承われば世間には猫の恋とか称する俳諧趣味の現象があつて、春さきは町内の同族共の夢安からぬまで浮うかれ歩あるく夜もあるとか云うが、吾輩はまだかかると心的変化に遭逢した事はない。そもそも恋は宇宙的の活力である。上は在天の神ジュピターより下は土中に鳴く蚯蚓みみず、おけらに至るまでもこの道にかけて浮身を躰やすのが万物の習いであるから、吾輩どもが臃おぼうれしと、物騒な風流気を出すのも無理のない話である。回顧すればかく云う吾輩も三毛子に思い焦こがれた事もある。三角主義の張本金田君の令嬢阿倍川の富子さえ寒月君に恋慕したと云う噂うわさである。それだから千金の春宵を心も空に満天下の雌猫雄猫が狂い廻るのを煩惱の迷のと輕蔑する念は毛頭ないのであるが、いかんせん誘われてもそんな心が出ないから仕方がない。吾輩目下の状態はただ休養を欲するのみである。こう眠くは恋も出来ぬ。のそのそと小供の布団の裾へ廻まつて心地快く眠る。……

ふと眼を開いて見ると主人はいつの間にか書齋から寢室へ来て細君の隣に延べてある布団の中にいつの間にか潜り込んでゐる。主人の癖として寝る時は必ず横文字の小本を書齋から携たえて来る。しかし横横になつてこの本を二頁と続けて読んだ事はない。ある時は持つて来て枕元へ置いたなり、まるで手を触れぬ事さえある。一行も読まぬくらいならわざわざ提たげてくる必要もなさそうなものだが、そこが主人の主人たるところでいくら細君が笑つても、止せと云つても、決して承知しない。毎夜読まない本をご苦労千万にも寢室まで運んでくる。ある時は慾張つて三四冊も抱えて来る。せんだつてじ

ゆづは毎晩ウェブスターの大典さえ抱えて来たくらいである。思つにこれは主人の病気で贅沢な人が竜文堂に鳴る松風の音を聞かないと寝つかれないごとく、主人も書物を枕元に置かないと眠れないのであるつ、して見ると主人に取つては書物は読む者ではない眠を誘う器械である。活版の睡眠剤である。

今夜も何か有るだろうと覗いて見ると、赤い薄い本が主人の口髯の先につかえるくらいな地位に半分開かれて転がっている。主人の左の手の拇指が本の間に挟まったままであるところから推すと奇特にも今夜は五六行読んだものらしい。赤い本と並んで例のごとくニツケルの袂時計が春に似合わぬ寒き色を放っている。

略

六

こう暑くては猫といえどもやり切れない。皮を脱いで、肉を脱いで骨だけで涼みたいものだ。と英吉利のシドニー・スミスとか云う人が苦しがつたと云う話があるが、たとい骨だけにならなくとも好いから、せめてこの淡灰色の斑入の毛衣だけはちよつと洗い張りでもするか、もしくは当分の中質にでも入れたいような気がする。人間から見たら猫などは年が年中同じ顔をして、春夏秋冬一枚看板で押し通す、至つて単純な無事な銭のかからない生涯を送つてるように思われるかも知れないが、いくら猫だつて相応に暑さ寒さの感じはある。たまには行水の一度くらいあびたくない事もないが、何しろこの毛衣の上から湯を使った日には乾かすのが容易な事でないから汗臭いのを我慢してこの年になるまで洗湯の暖簾を潜つた事はない。折々は団扇でも使つて見ようと云う気も起らぬではないが、とにかく握る事が出来ないのだから仕方がない。それを思うと人間は贅沢なものだ。なまで食つてしかるべきものをわざわざ煮て見たり、焼いて見たり、酢に漬けて見たり、味噌をつけて見たり好んで余計

な手数を懸けて御互に恐悦している。着物だつてそつだ。猫のように一年中同じ物を着通せと云うのは、不完全に生れついた彼等にとつて、ちと無理かも知れんが、なにもあんなに雑多なものを皮膚の上へ載せて暮さなくてもの事だ。羊の御厄介になつたり、蚕の御世話になつたり、綿蟲の御情けさえ受けるに至つては贅沢は無能の結果だと断言しても好いくらいだ。衣食はまず大目に見て勘弁するとしたところで、生存上直接の利害もないところまでこの調子で押して行くのは毫も合点が行かぬ。第一頭の毛などと云うものは自然に生えるものだから、放つておく方がもつとも簡便で当人のためになるだろうと思うのに、彼等は入らぬ算段をして種々雑多な恰好をこしらえて得意である。坊主とか自称するものはいつ見ても頭を青くしている。暑いとその上へ日傘をかぶる。寒いと頭巾で包む。これでは何のために青い物を出しているのか主意が立たんではないか。そうかと思つと櫛とか称する無意味な鋸様の道具を用いて頭の毛を左右に等分して嬉しがつてるのもある。等分にしないと七分三分の割合で頭蓋骨の上へ人為的の区劃を立てる。中にはこの仕切りがつむじを通り過して後ろまで食み出しているのがある。まるで贗造の芭蕉葉のようだ。その次には脳天を平らに刈つて左右は真直に切り落す。丸い頭へ四角な枠をはめているから、植木屋を入れた杉垣根の写生としか受け取れない。このほか五分刈、三分刈、一分刈さえあると云う話だから、しまいには頭の裏まで刈り込んでマイナス一分刈、マイナス三分刈などと云う新奇な奴が流行するかも知れない。とにかくそんなに憂身を憂して

どうするつもりか分らん。第一、足が四本あるのに二本しか使わないと云うのから贅沢だ。四本であるけばそれだけかも行く訳なのに、いつでも二本ですまして、残る二本は到来の棒鱧ぼうたつのように手持無沙汰にぶら下げているのは馬鹿馬鹿しい。これで見ると人間はよほど猫より閑ひまなもので退屈たいくつのあまりかよつないたずらを考案して楽しんでるものと察せられる。ただおかしいのはこの閑人ひまじんがよると障さわると多忙だ多忙だと触れ廻まわるのみならず、その顔色がいかにも多忙らしい、わるくすると多忙に食い殺されはしまいかと思われるほどこせついている。彼等のあるものは吾輩を見て時々あんなになつたら気楽でよかろうなどと云つが、気楽でよければなるが好い。そんなにこせこせしてくれと誰も頼んだ訳でもなからう。自分で勝手な用事を手に負えぬほど製造して苦しい苦しいと云うのは自分で火をかかん起して暑い暑いと云つようなものだ。猫だつて頭の刈り方を二十通りも考え出す日には、こつ気楽にしてはおられんさ。気楽になりたければ吾輩のように夏でも毛衣けいふを着て通とされるだけの修業しゆぎやうをするがよろしい。とは云うものの少々熱あつい。毛衣では全く熱あつつ過ぎる。

七

吾輩は近頃運動を始めた。猫の癖に運動なんて利いた風だと一概に冷罵し去る手合にちよつと申し聞けるが、そう云う人間だつてつい近年までは運動の何者たるを解せずに、食つて寝るのを天職のように心得ていたではないか。無事は貴人とか称えて、懐手をして座布団から腐れかかつた尻を離さざるをもつて旦那の名誉と脂下つて暮したのは覚えてははずだ。運動をしるの、牛乳を飲めの冷水を浴びるの、海の中へ飛び込めの、夏になつたら山の中へ籠つて当分霞を食えのとくだらぬ注文を連発するようになつたのは、西洋から神国へ伝染した晩近の病気で、やはりペスト、肺病、神経衰弱の一族と心得ていくらいだ。もっとも吾輩は去年生れたばかりで、当年とつて一歳だから人間がこんな病気に罹り出した当時の有様は記憶に存しておらん、のみならずその砌りは浮世の風中にふわついておらなかつたに相違ないが、猫の一年は人間の十年に懸け合つと云つてもよろしい。吾等の寿命は人間より二倍も三倍も短いに係らず、その短日月の間に猫一疋の発達は十分仕るところをもつて推論すると、人間の年月と猫の星霜を同じ割合に打算するのははなはだしき誤謬である。第一、一歳何カ月

に足らぬ吾輩がこのくらいの見識を有しているでも分るだろう。主人の第三女などは数え年で三つだそうだが、智識の發達から云うと、いやはや鈍いものだ。泣く事と、寝小便をする事と、おっぱいを飲む事よりほかに何にも知らない。世を憂い時を憤る吾輩などに較べると、からたわいのない者だ。それだから吾輩が運動、海水浴、転地療養の歴史を方寸のうちに畳み込んでいたって毫も驚くに足りない。これしきの事をもし驚ろく者があつたなら、それは人間と云う足の二本足りない野呂間に極つている。人間は昔から野呂間である。であるから近頃に至つて漸々運動の機能を吹聴したり、海水浴の利益を喋々として大發明のよつに考えるのである。吾輩などは生れない前からそのくらいな事はちゃんと心得ている。第一海水がなせ薬になるかと云えばちよつと海岸へ行けばすぐ分る事じゃないか。あんな広い所に魚が何疋おるか分らないが、あの魚が一疋も病氣をして医者にかかつた試しがない。みんな健全に泳いでいる。病氣をすれば、からだか利かなくなる。死ねば必ず浮く。それだから魚の往生をあがると云つて、鳥の薨去を、落ちると唱え、人間の寂滅をこねると号している。洋行をして印度洋を横断した人に君、魚の死ぬところを見た事がありますかと聞いて見るがいい、誰でもいいえと答えるに極つている。それはそう答える訳だ。いくら往復したつて一匹も波の上に今呼吸を引き取つた　呼吸ではいかん、魚の事だから潮を引き取つたと云わなければならん　潮を引き取つて浮いているのを見た者はないからだ。あの渺々たる、あの漫々たる、大海を日となく夜となく続けざま

に石炭を焚たいて探さがしてあるいても古往こわう今来こんらい一匹も魚が上がっておらんところをもつて推論すれば、魚はよほど丈夫なものに違ちがないと云う断案はすぐに下す事が出来る。それならなぜ魚がそんなに丈夫なのかと云えばこれまた人間を待つてしかる後のちに知らざるなりで、訳わけはない。すぐ分る。全く潮水しほみづを呑んで始終海水浴をやっているからだ。海水浴の機能はしかく魚に取つて顯著けんちやくである。魚に取つて顯著である以上は人間に取つても顯著でなくてはならん。一七五〇年にドクトル・リチャード・ラッセルがブライトンの海水に飛込めば四百四病そくせち即席全快と大袈裟な広告を出したのは遅い遅いと笑つてもよるしい。猫といえども相当の時機が到着すれば、みんな鎌倉あたりへ出掛けるつもりでいる。但たし今はいけない。物には時機がある。御維新前ごいっしんまえの日本人が海水浴の機能を味わう事が出来ずに死んだこととく、今日の猫はいまだ裸体で海の中へ飛び込むべき機会に遭遇そうぐしておらん。せいては事を仕損しんずる、今日のように築地つくじへ打つちやられに行つた猫が無事に帰宅せん間は無暗むやみに飛び込む訳には行かん。進化の法則で吾等猫輩の機能が狂瀾怒濤きやうらんぬたうに対して適當の抵抗力を生ずるに至るまでは 換言すれば猫が死んだと云う代りに猫が上がつたと云う語が一般に使用せらるるまでは 容易に海水浴は出来ん。

垣巡りと云う運動を説明した時に、主人の庭を結び繞らしてある竹垣の事をちよつと述べたつもりであるが、この竹垣の外がすぐ隣家、即ち南隣の次郎ちゃんのこと思つては誤解である。家賃は安いがそこは苦沙弥先生である。与っちゃや次郎ちゃんなどと号する、いわゆるちゃん付きの連中と、薄っ片な垣一重を隔てて御隣り同志の親密なる交際は結んでおらぬ。この垣の外は五六間の空地であつて、その尽くるところに檜が蕪然と五六本併んでいる。椽側から拝見すると、向うは茂つた森で、ここに往む先生は野中の一軒家に、無名の猫を友にして日月を送る江湖の処士であるかのごとき感がある。但し檜の枝は吹聴することく密生しておらんで、その間から群鶴館という、名前だけ立派な安下宿の安屋根が遠慮なく見えるから、しかく先生を想像するのにはよほど骨の折れるのは無論である。しかしこの下宿が群鶴館なら先生の居はたしかに臥竜窟くらいな価値はある。名前に税はかからんから御互にえらそうな奴を勝手次第に付ける事として、この幅五六間の空地が竹垣を添うて東西に走る

事約十間、それから、たちまち鉤かぎの手に屈曲して、臥竜窟の北面を取り囲んでいる。この北面が騒動の種である。本来なら空地を行き尽してまたあき地、とか何とか威張つてもいいくらいに家の二側ふたがわを包んでいるのだが、臥竜窟の主人は無論窟内の靈猫たる吾輩すらこのあき地には手こずっている。南側に檜ひのきが幅を利かしているごとく、北側には桐きりぎりすの木が七八本行列している。もう周囲一尺くらいにのびているから下駄屋さえ連れてくればいい価になるのだが、借家の悲しさには、いくら気が付いても実行は出来ん。主人に対しても気の毒である。せんだって学校の小使が来て枝を一本切つて行つたが、そのつぎに来た時は新しい桐の俎下駄ひたぎを穿はいて、この間の枝でこしらえましたと、聞きもせんに吹聴うりやせしていた。ずるい奴だ。桐はあるが吾輩及び主人家族にとつては一文にもならない桐である。玉を抱いだいて罪ありと云う古語があるそつだが、これは桐を生はやして銭ねなしと云つてもしかるべきもので、いわゆる宝の持ち腐れである。愚ぐなるものは主人にあらず、吾輩にあらず、家主の伝兵衛である。いまいかな、いまいかな、下駄屋はいまいかなと桐の方で催促しているのに知らん面おもをして屋賃やぢんばかり取り立てにくる。吾輩は別に伝兵衛に恨みもないから彼の悪口あくぐちをこのくらいにして、本題に戻つてこの空地あきが騒動の種であると云う珍譚めづたを紹介しょうかい仕しるが、決して主人にいつてはいけない。これぎりの話である。そもそもこの空地に関して第一の不都合なる事は垣根のない事である。吹き払い、吹き通し、抜け裏、通行御免天下晴れての空地である。あると云つと嘘をつくようによろしくない。実を云つと

あつたのである。しかし話しは過去へ溯さかのぼらんと原因が分らない。原因が分らないと、医者でも処方しよほうに迷惑する。だからここへ引き越して来た当時からゆっくりと話し始める。吹き通しも夏はせいせいして心持がいいものだ、不用心だつて金のないところに盗難のあるはずはない。だから主人の家に、あらゆる塀へい、垣かき、乃至は乱杭らんくわい、逆茂木の類は全く不要である。しかしながらこれは空地の向うに住居すまいする人間もしくは動物の種類如何によつて決せらるる問題であると思ふ。従つてこの問題を決するためには勢い向う側に陣取つている君子の性質を明かにせんければならん。人間だか動物だか分らない先に君子と称するのはなほだ早計のよつではあるが大抵君子で間違はない。梁上りやうじやうの君子などと云つて泥棒さえ君子と云う世の中である。但たしこの場合における君子は決して警察の厄介になるような君子ではない。警察の厄介にならない代りに、数でこなした者と見えて沢山いる。うじゃうじゃいる。落雲館らくうんかんと称する私立の中学校 八百の君子をいやが上に君子に養成するために毎月二円の月謝を徴集する学校である。名前が落雲館だから風流な君子ばかりかと思つと、それがそもその間違になる。その信用すべからざる事は群鶴館ぐんかくかんに鶴の下りざるごとく、臥竜窟ふりりゆうくつに猫がいるようなものである。学士とか教師とか号するものに主人苦沙弥君のごとき気違のある事を知つた以上は落雲館の君子が風流漢ばかりでないと言ふ事がわかる訳だ。それがわからんと主張するならまず三日ばかり主人のうちへ宿しゆくりに来て見るがいい。

略

九

主人は痘痕面である。御維新前はあばたも大分流行つたものだそうだが日英同盟の今日から見ると、こんな顔はいささか時候後れの感がある。あばたの衰退は人口の増殖と反比例して近き将来には全くその迹を絶つに至るだろうとは医学上の統計から精密に割り出されたる結論であつて、吾輩のごとき猫といえども毫も疑を挟む余地のないほどの名論である。現今地球上にあばたつ面を有して生息している人間は何人くらいあるか知らんが、吾輩が交際の区域内において打算して見ると、猫には一匹もない。人間にはたった一人ある。しかしてその一人が即ち主人である。はなはだ気の毒である。吾輩は主人の顔を見る度に考える。まあ何の因果でこんな妙な顔をして臆面なく二十世紀の空気を呼吸しているのだろう。昔なら少しは幅も利いたか知らんが、あらゆるあばたが二の腕へ立ち退きを命ぜられた昨今、依然として鼻の頭や頬の上へ陣取つて頑として動かないのは自慢にならんのみか、かえつてあばたの体面に関する訳だ。出来る事なら今のうち取り払つたらよさそうなものだ。あばた

自身だつて心細いに違いない。それとも党勢不振の際、誓つて落日を中天に挽回せざるばやまずと云う意気込みで、あんなに横風に顔一面を占領しているのか知らん。そうするとこのあばたは決して輕蔑の意をもつて視るべきものでない。滔々たる流俗に抗する万古不磨の穴の集合体であつて、大に吾人の尊敬に値する凸凹と云つて宜しい。ただきたならしいのが欠点である。

略

十

「あなた、もう七時ですよ」と襖越しに細君が声を掛けた。主人は眼がさめているのだから、寝ているのだが、向うむきになったぎり返事もしない。返事をしないのはこの男の癖である。ぜひ何とか口を切らなければならぬ時はうんと云う。このうんも容易な事では出てこない。人間も返事がうるさくなるくらい無精になると、どこことなく趣があるが、こんな人に限って女に好かれた試しがない。現在連れ添う細君ですら、あまり珍重しておらんよつだから、その他は推して知るべしと云つても大した間違はなからう。親兄弟に見離され、あかの他人の傾城に、可愛がらりようはずがない、とある以上は、細君にさえ持てない主人が、世間一般の淑女に気に入るはずがない。何も異性間に不人望な主人をこの際ことさらに暴露する必要もないのだが、本人において存外な考え違をして、全く年廻りのせいで細君に好かれぬのだなどと理窟をつけていると、迷の種であるから、自覚の一助にもなろうかと親切心からちよつと申し添えるまでである。

言いつけられた時刻に、時刻がきたと注意しても、先方がその注意を無にする以上は、向をむいてうんさえ発せざる以上は、その曲は夫にあつて、妻にあらずと論定したる細君は、遅くなつても知りませんよと云う姿勢で箒とはたきを担いで書斎の方へ行つてしまつた。やがてはたばた書斎中を叩き散らす音がするのは例によつて例のごとき掃除を始めたのである。一体掃除の目的は運動のためか、遊戯のためか、掃除の役目を帯びぬ吾輩の関知するところでないから、知らん顔をしていれば差し支えないようなものの、この細君の掃除法のごときに至つてはすこぶる無意義のものと云わざるを得ない。何が無意義であるかと云つと、この細君は単に掃除のために掃除をしているからである。はたきを一通り障子へかけて、箒を一応置の上へ滑らせる。それで掃除は完成した者と解釈している。掃除の原因及び結果に至つては微塵の責任だに背負つておらん。かるが故に奇麗な所は毎日奇麗だが、ごみのある所、ほこりの積つている所はいつでもごみが溜つてほこりが積つている。告朔の云う故事もある事だから、これでもやらんよりはましかも知れない。しかしやつても別段主人のためにはならない。ならないところを毎日毎日御苦労にもやるところが細君のえらいところである。細君と掃除とは多年の習慣で、器械的の連想をかたづけつゝ頑として結びつけられているにもかかわらず、掃除の実に至つては、妻君がまだ生れざる以前のごとく、はたきと箒が発明せられざる昔のごとく、毫も挙つておらん。思うにこの両者の関係は形式論理学の命題における名辞のごとくその内容のいかにか

わらず結合せられたものである。

略

十一

床の間の前に碁盤を中に据えて迷亭君と独仙君が対坐している。

「ただはやらない。負けた方が何か奢るんだぜ。いいかい」と迷亭君が念を押すと、独仙君は例のごとく山羊髯を引つ張りながら、「こう云った。

「そんな事をする、せつかくの清戯を俗了してしまつ。かけなどで勝負に心を奪われては面白くない。成敗を度外において、白雲の自然に岫を出でて再々たること心持ちで一局を了してこそ、個中の味はわかるものだよ」

「また来たね。そんな仙骨を相手にしちゃ少々骨が折れ過ぎる。宛然たる列仙伝中の人物だね」

「無絃の素琴を弾じよ」

「無線の電信をかけかね」

「とにかく、やろつ」

「君が白を持つのかい」

「どつちでも構わない」

「さすがに仙人だけあって鷹揚だ。君が白なら自然の順序として僕は黒だね。さあ、来たまえ。どこからでも来たまえ」

「黒から打つのが法則だよ」

「なるほど。しからは謙遜して、定石にここいらから行こう」

「定石にそんなのはないよ」

「なくつても構わない。新奇発明の定石だ」

吾輩は世間が狭いから碁盤と云うものは近来になって始めて拝見したのだが、考えれば考えるほど妙に出来ている。広くもない四角な板を狭苦しく四角に仕切つて、目が眩むほどこたこたと黒白の石をならべる。そうして勝つたとか、負けたとか、死んだとか、生きたとか、あぶら汗を流して騒いでいる。高が一尺四方くらいの面積だ。猫の前足で掻き散らしても滅茶滅茶になる。引き寄せて結ば草の庵にて、解くればもとの野原なりけり。入らざるいたずらだ。懐手をして盤を眺めている方が遙かに気楽である。それも最初の三四十目は、石の並べ方では別段目障りにもならないが、いざ天下わけ目と云う間際に覗いて見ると、いやはや御気の毒な有様だ。白と黒が盤から、こぼれ落ちるまでに押

し合つて、御互にギューギュー云つている。窮屈だからと云つて、隣りの奴にどいて貰う訳にも行かず、邪魔だと申して前の先生に退去を命ずる権利もなし、天命とあきらめて、じつとして身動きもせず、すくんでいるよりほかに、どうする事も出来ない。暮を発明したものは人間で、人間の嗜好が局面にあらわれるものとすれば、窮屈なる暮石の運命はせせこましい人間の性質を代表していると云つても差支えない。人間の性質が暮石の運命で推知する事が出来るものとすれば、人間とは天空海濶の世界を、我からと縮めて、己れの立つ両足以外には、どうあつても踏み出せぬように、小刀細工で自分の領分に縄張りをするのが好きなんだと断言せざるを得ない。人間とはしいて苦痛を求めるものであると一言に評してもよからう。

呑気なる迷亭君と、禅機ある独仙君とは、どう云つて見か、今日に限つて戸棚から古暮盤を引きずり出して、この暑苦しいいたずらを始めたのである。さすがに御兩人御揃いの事だから、最初のうちは各自任意の行動をとつて、盤の上を白石と黒石が自由自在に飛び交わしていたが、盤の広さには限りがあつて、横豎の目盛りは一手ごとに埋つて行くのだから、いかに呑気でも、いかに禅機があつても、苦しくなるのは当り前である。

「迷亭君、君の暮は乱暴だよ。そんな所へ這入つてくる法はない」

「禅坊主の暮にはこんな法はないかも知れないが、本因坊の流儀じゃ、あるんだから仕方がないさ」

「しかし死ぬばかりだぜ」

「臣死をだも辞せず、いわんやをやと、一つ、こう行くな」

「そうおいでになったと、よろしい。薫風南かんななみより来つて、殿閣微涼てんかくびりょうを生ず。こう、ついでおけば大丈夫なものだ」

「おや、ついだのは、さすがにえらい。まさか、つく気遣きせひはなかるうと思つた。ついで、くりやるな八幡鐘はちまんかねをと、こうやったら、どうするかね」

「どうするも、こうするもないさ。一剣天に倚よつて寒し。ええ、面倒だ。思い切つて、切つてしまえ」

「やや、大変大変。そこを切られちゃ死んでしまふ。おい冗談冗談じゃない。ちよつと待つた」

「それだから、さつきから云わん事じゃない。こうなつてるところへは這入はいれるものじゃないんだ」

「這入はいつて失敬じまう仕り候。ちよつとこの白をとつてくれたまえ」

「それも待つのかい」

吾輩は我慢に我慢を重ねて、ようやく一杯のビールを飲み干した時、妙な現象が起つた。始めは舌がぴりぴりして、口中が外部から圧迫されるように苦しかったのが、飲むに従つてようやく楽になつて、一杯目を片付ける時分には別段骨も折れなくなつた。もう大丈夫と二杯目は難なくやつつけた。ついでに盆の上にこぼれたのも拭うがごとく腹内に収めた。

それからしばらくの間は自分で自分の動静を伺つたため、じつとすくんでいた。次第にからだが暖かになる。眼のふちがぼつととする。耳がほてる。歌がうたいたくなる。猫じゃ猫じゃが踊りたくなる。主人も迷亭も独仙も糞を食えと云う氣になる。金田のじいさんを引掻いてやりたくなる。妻君の鼻を食い欠きたくなる。いろいろになる。最後にふらふらと立ちたくなる。起つたらよたよたあるきたくなる。こいつは面白いとそとへ出たくなる。出ると御月様今晚はと挨拶したくなる。どうも愉快だ。

陶然とはこんな事を云うのだからと思ひながら、あてもなく、そこかしこ散歩するよつな、しないよつな心持でしまりのない足をいい加減に運ばせてゆくと、何だかしきりに眠い。寝ているのだからあるいてるのだから判然しない。眼はあけるつもりだが重い事夥しい。こうなればそれまでだ。海だろが、山だろが驚ろかないんだと、前足をぐにやりと前へ出したと思つ途端ぼちゃんと音がして、はつと云ううち、やられた。どうやられたのか考える間がない。ただやられたなと気がつくか、

つかないのにあとは滅茶苦茶になってしまった。

我に帰ったときは水の上に浮いている。苦しいから爪でもって矢鱈やたらに掻いたが、掻けるものは水ばかりで、掻くとすぐもぐつてしまう。仕方がないから後足あとあしで飛び上つておいて、前足で掻いたら、がりりと音がしてわずかに手応てしたえがあった。ようやく頭だけ浮くからどこだろうと見廻わすと、吾輩は大きな甕かめの中に落ちている。この甕は夏まで水葵みなぎわいと称する水草が茂っていたがその後烏の勘公が来て葵を食い尽した上に行水ぎょうすいを使う。行水を使えば水が減る。減れば来なくなる。近来は大分たいぶん減つて烏が見えないと先刻さきしゆ思ったが、吾輩自身が烏の代りにこんな所で行水を使おうなどとは思ひも寄らなかつた。

水から縁ひしまでは四寸余よもある。足をのばしても届かない。飛び上つても出られない。呑気のんきにしていれば沈むばかりだ。もがけばがりりと甕に爪があたるのみで、あつた時は、少し浮く気味だが、すべればたちまちぐつともぐる。もぐれば苦しいから、すぐがりりをやる。そのうちからだが疲れてくる。気は焦あせるが、足はさほど利きかなくなる。ついにはもぐるために甕を掻くのか、掻くためにもぐるのか、自分でも分りにくくなつた。

その時苦しいながら、こう考えた。こんな呵責かしやくに逢うのはつまり甕から上へあがりた**い**ばかりの願である。あがりた**い**のは山々であるが上**が**れないのは知れ切つて**い**る。吾輩の足は三寸に足らぬ。よ

し水の面おもてにからだか浮いて、浮いた所から思う存分前足をのばしたって五寸にあまる麤この縁に爪のかりようがない。麤このふちに爪のかりようがなければいくらも搔かいても、あせっても、百年の間身を粉にしても出られっこない。出られないと分り切っているものをしようとするのは無理だ。無理を通そうとするから苦しいのだ。つまらない。自らみずか求めて苦しんで、自ら好んで拷問ごうもんに罹かっているのは馬鹿ばか気けている。

「もうよそう。勝手にするがいい。がりがりはこれぎりこ免蒙めんぼうるよ」と、前足も、後足も、頭も尾も自然の力に任せて抵抗しない事にした。

次第に楽になつてくる。苦しいのだからありがたいのだから見当がつかない。水の中にいるのだから、座敷の上にいるのだから、判然しない。どこにどうしていても差支さしえはない。ただ楽である。否いな楽そのものすらも感じ得ない。日月じつげつを切り落し、天地を粉壘ふんせいして不可思議の太平に入る。吾輩わがは死ぬ。死んでこの太平を得る。太平は死ななければ得られぬ。南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。ありがたいありがたい。

吾輩は猫である

著者 夏目漱石

発表 「ホトトギス」連載

明治三十八年一月から八月